

平成 28 年度 入学宣誓式 学長告辞

本日ここに入学宣誓式を迎えられた 学部生 666 名、大学院博士前期課程 508 名、博士後期課程 26 名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表し、心から歓迎の意を表します。

今日、皆さんの新しい力を迎え入れることができたことは、京都工芸繊維大学にとって、誠に大きな喜びであります。新入生の皆さんは、希望と喜びをもって、今日の入学宣誓式に臨まれたことと思います。しかしながら、我々を取り巻く状況は日々厳しさを増しております。社会・経済・科学技術に関して、根本から問い直さなければならぬ事態となっております。本日は、あなた方新入生にとって、記念すべき日ではありますが、同時に、私たち国立大学に課せられた期待の大きさを認識し、困難な課題に立ち向かう勇気を奮い起すべき日でもあります。

本学は、教員数約 300 名、学生数約 4000 名、工芸科学部・工芸科学研究科の一学部・一研究科の国立理工系大学です。本学は、京都蚕業講習所及び京都高等工芸学校を淵源とし、開闢以来 110 余年にわたって、産業の近代化や高度成長における理工系人材要請など、時代の要請に応じて教育研究領域を変化・発展させてきました。この歴史をふまえ、国立大学のミッション再定義においては、工学分野で「デザイン・建築」及び「高分子・繊維材料」さらには、「電子工学によるグリーンイノベーション」の分野において、強みと特色があると認められ、生命物質科学、設計工学、造形科学の幅広い分野において「科学と芸術の融合」を理念とする教育・研究を展開しています。

本学は、平成 18 年に教教分離の理念の下、教員組織と教育組織を分離する教育研究組織の改組を行いました。教育組織の枠を越え、全学の資源を用いて多様な教育プログラムを柔軟に編成できるというメリットを生かし、全学体制の構築を図ったものであります。教員は工芸科学研究科に置く「学系」に所属し、一方、学生は「課程」及び「専攻」に所属し、教員組織と学生組織は互いに独立した組織として機能することを目指したものです。

つづいて平成 26 年には、大学のガバナンス機能強化を図る学校教育法の改正が行われ、この法改正の趣旨を踏まえ、本学の重点課題である研究力の強化を図る観点から、「学域」、「学系」、「機構」という 3 つの組織化を行い、役割分担を明確にする組織改革を行いました。

第一に「学系 (faculty)」は教員組織であり、専門領域に基づき、30 人～50 人規模の教員集団とし、当該学系の研究力向上のための将来計画、研究評価、研究、技術開発、作品等についてピアレビューを行います。

第二に「学域 (academic field)」は教育組織であり、学部・大学院の教育プログラムを担当する組織です。本学には学部に 9 課程、大学院修士 14 専攻、大学院博士 8 専攻が設置されており、これらを 4 つの学域の下に配置するとともに、全学共通教育を担う基盤教育学域とあわせて、5 学域を設置しています。担当理事・副学長が主宰する「総合教育センター」においてアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの三つのポリシーを定め、カリキュラム改革の企画立案を行うことで、学部・研究科が一体となって教育改革を行う体制を構築しています。教員の所属組織はあくまで学系であり、各教員は学域・課程・専攻を「担当する」という仕組みとしています。こうして教員は所属する学系に依らず教育プログラムを担当するため、専門分野に応じた柔軟な教育課程の編成が可能となっています。

第三に「機構」は大学の重点戦略や教育研究の基盤を担う組織です。近年、これらの組織の重要性が高まっており、本学においても、「KYOTO Design Lab」、「スーパーグローバル大学推進拠点」、「COIヘルスサイエンス拠点」、「COC推進拠点」など、文部科学省からの公的プログラムの選定を受けて学長直下で機動的に運営ができる組織体として機能しています。また、海外の一線級研究者や優れた若手教員が所属する組織として「グローバルエクセレンス」を戦略機構の直下に設置し、卓越した教員集団を形成する取組を進めています。

今日の入学宣誓式にあたり、京都工芸繊維大学が掲げる理念を踏まえ、「科学と芸術」とモノづくり、「知と美と技」に通底するモノづくりについて改めて考え、新入生諸君にモノづくりというものが、学術文化にどのように貢献してきたのか、を伝えたいと思います。

そもそも、学問の府である大学においては、理論的考察が第一義であり、個別具体の技術は一段低くみられる傾向があります。モノづくりは、個別具体的であり、現場主義であり、肉体作業を伴うものであり、それゆえに全体を見渡して理論化することが困難な分野であり、言葉にすることが苦手な世界であります。このため、モノづくりは理論研究より低くみられる傾向が出てきます。しかしながら私たち理工系大学においては、実践的なモノづくりが、いかに社会の役に立つかを喧伝するだけでなく、真理の探究においても人間の理解においても、たとえば哲学と同等の役割を果たし、学術文化の形成に寄与してきたことを深く認識しなければなりません。我々が、アカデミズムの世界だけでなく実務の世界においても、自覚と自信をもって活躍するためには、モノづくりという領域に、理論的な根拠、あるいは歴史的な根拠のあることを確認することが必要であります。

例えば、「隠喩としての建築」という著作の中で、柄谷行人は次のように指摘しています。

「古代ギリシャにおいて、哲学者を定義するにあたって、建築家を哲学者の隠喩として用いたことはよく知られている。ギリシャ語において、建築はアーキテクトンというが、この語は、始原や始まり、原理を意味するアルケーと職人を意味するテクトンの合成語である。つまり、ギリシャ人にとって、建築は単なる職人の技術ではなく、原理的な知識をもち、個別の技術や職人を統括し、製作を企画立案、指導する技術と理解されていた。語源の詮索はともかく、重要なことは、プラトンやアリストテレスが哲学者を建築家になぞらえ、哲学を知の建築、知的構築物と見なした点である。プラトンはその著「饗宴」の中で、あらゆる技術に属する製作は、創作であり、それに従事する工作者は創作者なのである、と言っている。」

このように、モノづくりの本質は、世界を構築するという作業であります。西洋文明の起源であるギリシャにおいても、偉大な職人は、哲学者と肩を並べ、世界をモノで構築するか、言葉で構築するかの違いはあるものの、両者の役割に違いはなかったのであります。本学が展開してきた実践的な教育研究活動に自信と誇りをもって、学生生活を送って頂きたいと思います。

近年、本学学生諸君の活躍はめざましく、社会からの評価も大変高くなっております。

昨年日経キャリアが行った、全上場企業対象の「企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査」では、国公私合わせて約 800 大学のうち、本学卒業生は総合 14 位、独創性においては第 9 位に位置づけられております。また学生フォーミュラ大会では優勝、準優勝など毎年入賞を果たし、「トビタテ！留学 JAPAN」という、文部科学省が実施している官民協働海外留学支援制度の採用者数は、理工系大学のなかでもトップクラスの採択率を誇っております。このように、本学学生の技術力・知識・実践能力は社会から極めて高く評価されており、私たちは、皆さん方がこうした先輩諸君の実績を遙かに越えた活躍をされることを期待しています。

また本学は今年の 4 月から京都府北部の福知山市に北京都分校を開校しました。昨年は東京青山にオフィスを開設しましたが、さらにタイのバンコクやチェンマイの協定大学にもオフィスを開設しています。ヨーロッパではパリや英国のケンブリッジにも拠点を整備する計画です。皆さんは本学松ヶ崎キャンパスでの基礎的教育を踏まえ、京都府立大学や京都府立医科大学と共同実施される教養教育の場において、また、企業インターンシップや、海外協定大学への留学や海外でのインターンシップにも参加していただき、多様な人々との交流を通じて、社会性と実践力を磨いていただきたいと思います。

結びにあたって、今日から皆さんが学ぶべき大学、京都工芸繊維大学をよく知り、そして好きになること。それが自らの学習と研究活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。松ヶ崎の地にあっても、その研究成果や教育成果は、常に世界とつながっており、海外からも見られていることを意識して学生生活を送ってください。そして、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って、勉学に励み、卒業していただきたいと思います。

勉学や研究において、多くの感動を体験し、それらを友人と共有することによって、実り豊かな学生生活を送られることを祈念して、お祝いの言葉といたします。

平成 28 年 4 月 5 日
京都工芸繊維大学長
古山 正雄